

巻頭言

「見えないもの」を見た先に

コミュニティ福祉学研究科委員長 三本松 政之

私たちが研究をするにあたっての出発は、必ずしも論理的あるいは科学的な認識にもとづくものではないのではないのでしょうか。自然科学であれ社会科学であれば出発点には、自分のなかに生じた問いがあるのではないかと思います。何故こんなことが生じるのだろうか、どうしてこんな結果になるのだろうか、あるいは何がこのような状況を作り出すのだろうかなどの疑問です。

学生の論文指導をしていて意外と難しいのがこの最初の素朴な問いに気づいてもらうことです。論文を書くのにはテーマが求められます。学生たちがゼミの発表などで提示してくるテーマは、必ずしもこの問いと一致していないことが多いように思います。

科研費の申請書などでは、テーマについて40字程度のタイトルを求められます。これは論文を書くときに学生たちがよく最初に示すテーマとして「〇〇と××について」式のタイトルを避けるために長めの説明的なテーマが要求されているのだと考えます。

「〇〇と××について」式のテーマでは、「と」で結び付けられる前後の脈絡を説明した気にさせてしまいます。前後の関係が論理的につながってなくてもandを用いることでつながっていて、もうその前後の関係を説明したように思わせるのではないのでしょうか。

しかし、私たちが研究対象とする事象は、「〇〇における」というようなある前提条件のもとで生じる現象について、しかも「××の視点から」などというように特定の視点などにもとづいて考察をしています。

「テーマ」はこのような研究者自身が見ようとする事象や対象を提示し、またその捉える視点

を示すものであると考えられます。ただ自分が見ようとしている、あるいは見えている（つもりの）そこに生じている事象そのものをまずは他者と共有することが必要です。見えにくいものを他の人と共有するためには、ときにはそれが見えるようにするための道具が必要になります。例えば、私たちは微細なものをみるためには虫メガネや顕微鏡を用い、遠くのものを見るためには望遠鏡や双眼鏡を用います。そのような適当な道具がなければ工夫をして道具をまず作り出す必要があります。

研究において道具にあたるのが概念装置です。内田義彦は『読書と社会科学』（岩波新書、1985）において「概念装置という、ものを見るための装置を脳髓のなかに組立てるために読む仕事が含まれており、とくに社会科学の場合には、これ（概念装置）を獲得するための読書が特徴的に大きくなっていて、問題を複雑にしています」と記しています。内田は、社会科学は「学生の眼をものに向って端的に開いてくれるような、そういう便利有効な物的装置を備えていない」とし、「肉眼では見えない。掘りおこしてはじめて問題が問題として出てくる、という不明確なかたちで問題は存在しています。何か問題があるらしいが、何を問題とすべきか、問題とすべき対象は見えない。日常語の世界にうずまり日常語だけに頼っていては、学問的に説明することができないだけではなく、解決すべき問題そのものも明確には捉えられない」と述べます。

他の人もその道具、概念を使えば見るようになるようになるように、概念規定という手続きを通じて、同じ手続きによれば見えるようにします。さらにこれら概念装置を組み合わせな

がら理論化が進められるわけですが、ここではこの話はこの辺にとどめておきます。

ここで考えたいのは、見ようとするものが他の人と共有されたその先のことです。実際には、見ようとするものを共有する過程自体が上述したようにそれほど簡単なことではありませんので、ここまでたどり着いたことで自分の課題が達成できたと考えてしまうかもしれません。自分が見ようとした「見えないもの」を共有できたその先に、その構造や機能について論じ、検

証し、さらにそのことが持つ意義を明らかにしていくことが待っています。したがって共有は出発点です。そのことを自覚したうえで「見えないもの」のその先に自分が解き明かそうとしていることが何なのかを改めて問いなおしてみることが大切なように思います。そのことが研究成果の普遍性につながるからです。本号に寄せられた論考が何を問い、何を明らかにしようとしているのかを読み解きたいと思います。